北海道大学アイヌ・先住民研究センター

シシリムカサテライト2008年度第１回講座（札幌会場）　講演録

「マンローと鳥居　―同時代を生きた二人の事績、その活用」

日　時：　２００８年６月１５日（日）

場　所：　北海道大学　人文・社会科学総合教育研究棟　Ｗ２０２号室

主　催：　北海道大学アイヌ・先住民研究センター

演　題：　鳥居龍蔵の東アジア研究　－その足跡と今日的意義－

講　師：　元徳島県立博物館館長　天羽利夫氏

「千島アイヌ!千島アイヌ!」

汝は古来波風荒き千島列島に、 水草を追ひて、 移住往来し、 北はよくカムチャダールを圧し、 南はよくヤングルを恐れしめたり。 嗚呼何ぞ其の剽悍勇猛なる。 されど敵者生存、優勝劣敗の原則は、 汝の手より幸福を奪ひ去り、 今や昔日の勇気已に消滅し、 其の人口の如き、 又減じ減じて、 憐れにも僅かに六十余名を残すのみ。 この形成を以て進み行かば、汝の運命将に知るべきのみ。この運命を知る者、何ぞ一滴の涙なき能はざらんや。 其の汝に向ての同情は遂に余をして、 本書を世に公にせしむるに至れり。余はこの書に因て、不肖なりと云えども、汝の体質、言語、神話、口碑、昔話、風俗、習慣、 古物、 遺跡等を記載し、 以て汝の何物たる、 汝の祖先の偉大なりしことを永く世に伝へんとす。 聊か思ふことを記して序とす。 」

鳥居龍蔵f千島アイヌ』自序より(吉川弘文館、1903年)

1、鳥居龍蔵の学問

プロフィール

1870(明治3)年4月4目、 徳島船場のたばこ問屋に生まれた。 小学校を中退し、 独学で人類学を学び、1892(明治25)年に一家をあげて東京に移住。 東京帝国大学人類学教室の標本整理をしながら勉学に励んだ。

1895(明治28)年の遼東半島の調査を皮切りに、台湾や西南中国、朝鮮半島、シベリアなど東アジア各地を精力的に調査した。

その後、東京帝国大学の講師・助教授に昇進したが、1924(大正13)年に突如辞職し、自ら鳥居人類学研究所を設立してきみ子夫人ら家族とともに活動した。

1939(昭和14)年、 中国北京の燕京大学から客員教授に招聘され、 北京に滞在して中国遼代を中心に研究を続けた。

1951(昭和26)年、中国から帰国。『ある老学徒の手記』の刊行を最後に、1953(昭和28)年1月14日、東京で82才の生涯を閉じた。

妻きみ子のプロフィール

本名キミ。 1881(明治14)年2月13日、 市原応資・とよ夫妻の三女として徳島市富田浦町に生まれる。富田尋常小学校、 徳島県尋常師範学校附属小学校高等科、 淑慎女学校を経て徳島県師範学校師範科を卒業。

卒業後、撫養尋常小学校の訓導として1年間勤務。後上京し、上野音楽学校に入学。翌1901(明治34)年12月、 鳥居龍蔵と結婚する。

1906(明治39)年3月、 蒙古カラチン王府女学堂の教師となり単身赴任する。『蒙古行』はその時起草したもの。 1ヶ月後、 龍蔵も蒙古に赴き、 蒙古カラチン王府男子学堂教授に就く。 蒙古では龍蔵の調査に同行し、『土俗学上より観たる蒙古』、『蒙古を再び探る』(龍蔵と共著)を著す。

帰国後も龍蔵の調査旅行に度々同行し、 調査の助手を務める。 近年、 女性民族学者の草分けとして評価が高まる。 1959(昭和34)年8月19日、 東京で没す。 享年79才。

鳥居龍蔵の生涯
第1期（1870-1890） 誕生から東京遊学
第2期（1890-1924） 東京遊学から東京帝国大学辞職までの東京帝国大学時代
第3期（1924-1953） 東京帝国大学辞職から死去するまでの鳥居.人類学研究所時代

鳥居龍蔵の特色
鳥居龍蔵を評して、「孤高の人」（松本清張)、「無冠の人類学者」(中薗英助)「探検型学者」（江上波夫）などと形容されることがある。

・幅広い領域の学問 人類学、民族学、考古学、歴史学など これら学問の先覚者
・野外調査を基調にして、 未踏査の東アジアを駆け巡つた 徹底したフィールドワーカー
遼東半島調査を皮切りに、台湾、西南中国、中国東北部、モンゴル、朝鮮半島、東部シベリア、サハリン、クリールなどを調査。さらにはブラジル、ボリビア、ペルーまで足を運ぶ。
・いわゆる日本人や日本文化のルーツをアジア周辺地域から探究
・調査の成果はあまねく公表し、 膨大な著作物を刊行。 欧文の著作物も多く、 海外への情報発信を心掛けた。
・カメラ、 鐵管蓄音機などの最新器機を野外調査に導入
カメラは1893(明治26)年第1回台湾調査から、 鐘管蓄音機は1904(明治37)年の第2回沖縄調査から。
鳥居が撮影した写真乾板は東京帝国大学人類学教室から受け継がれたものが1859枚、
東京大学総合研究博物館に残されている。 韓国国立中央博物館や徳島県立鳥居記念博物館にも貴重な記録写真が残されている。
鐘管蓄音機のデーターは現存しない。
・家族同行の調査
1907(明治40)年 第2回蒙古調査にきみ子と生まれて間もない幸子を同伴
1928(昭和3)年 第3回東部シベリア調査に幸子、第5回満州調査にきみ子・幸子同行1930(昭和5)年 第3回蒙古調査にきみ子同行
1931(昭和6)年 第6回満州調査にきみ子・龍次郎同行
1932(昭和7)年 第7回満州調査および第7回朝鮮調査に緑子・龍次郎同行
1933(昭和8)年 第4回蒙古調査および第8回満州調査にきみ子・緑子・龍次郎同行
1935(昭和10)年 第9回満州調査にきみ子・龍次郎同行
1937(昭和12)年 南米調査に龍次郎同行
1938(昭和13)年 遼および北宋関係遺跡調査に龍次郎同行

鳥居が人類学教室時代に採集した民族資料は国立民族学博物館に、 考古資料は東京大学総合研究博物館に収蔵されている。 朝鮮総督府からの委嘱で調査した資料は韓国国立中央博物館に、 鳥居人類学研究所時代の調査資料は鳥居記念博物館に収蔵されている。

2、東アジアを駆け巡る(年表参照)

1895年、 初めての海外調査として東京人類学会からの派遣で遼東半島調査に出向く。 8 月に東京を発ち、 宇品港からご用船に乗船して遼東半島柳樹屯の港に着き、 上陸後は徒歩による調査行であった。初めて見る広大な地形、 高粱畑の景観に驚きながら、 各地で石器を採集、 拆木城付近で2基のドルメンを発見、 古城などの調査を終えて12月下旬に帰国した。 5ヵ月にも及ぶ調査を経験した鳥居は、 海外調査の面白さとともに重要性を痛感して、海外調査への感心を高めていった。

これを契機に、台湾、西南中国、中国東北部、モンゴル、朝鮮半島、東部シベリア、サハリン、 クリールなどを勢力的に駆け巡った。 鳥居の海外での足跡を辿ってみると、 大きくは四グループに提えることができる。

その1つは台湾から西南中国の踏査、 2つ目は中国東北部・モンゴルの地域（鳥居の第二の故郷、「満蒙」と呼称した地域)、 3つ目に朝鮮半島、4つ目はクリール、サハリン、黒龍江流域の東シベリアである。

台湾一西南中国の調査 主として原住民族の民族学的、人類学的調査(台湾での円山貝塚調査など考古学調査もあるが）であった。 紅頭嶼（現蘭嶼）では鳥居には珍しく70日間という長期にわたる滞在型の調査を行った。 紅頭嶼の原住民をヤミ族（現タオ族）と命名したのは鳥居であった。 台湾調査は今まで4回とされていたが、 鳥居の遺品調査から

1910年にも調査のため出かけていることが明らかになった。
西南中国に目を向けたのは台湾の諾民族との比較が狙いであった。 西南中国の調査はおよそ9ヶ月にも及ぶ長旅であった。『苗族調査報告』は一級資料として今なお評価が高い。

・ 中国東北部・モンゴルの調査 きみ子夫人とともにカラチン王府の招聘をきっかけにこの地域の調査が始まったが、 夫妻で調査行の折には龍蔵は考古学的な調査を、 きみ子は民族学的な調査を主とした。 その後も、 鳥居は主に考古学的な研究に取り組み、「満蒙の有史以前」で学位を得た。また晩年、北京で在住中に取り組んだのは「遼代の考古学的研究」であった。

・朝鮮半島の調査 朝鮮総督府の委嘱をうけ、 予備調査から連続7年間にわたる調査をした。 与えられた課題は朝鮮半島の石器時代の遺跡と朝鮮人の生體測定であったが、 鳥居には不満であった。 朝鮮総督府に提出した復命書には古墳調査等も入っており、 住民の生活習慣や町並み等を数多く撮影し記録している。

・クリール、サハリン、 東シベリア調査 クリールの調査は滅び行く千島アイヌを主限とする調査であり、 北端のシュムシュ島での考古学的調査によって千島アイヌの居住地を裏付けるものであった。サハリン、東シベリア (アムール川流域)調査は樺太アイヌなど先住民、 少数民族の民族学的調査、 あるいは考古学的な遺跡調査であった。

3、 鳥居龍蔵のアイヌ研究

・アイヌ語をアイヌの人から学ぶ

1984(明治27)年から東京帝国大学文科大学言語学教室で、 地質学者神保小虎博士(1867-1924) によるアイヌ語の講義が始まったのを機に、 アイヌ語を学ぶようになった。

その時、 神保博士は北海道からパラサマレックという34、 5歳のアイヌ人を呼び、 講義の助手としていた。パラサマレックはしばらく神保博士宅に住んでいたが、 神保博士から「君はアイヌ語を傍聴し、 これを研究しているから、 バラサマレックを君の家に泊めてもらえないか。 そうすれば毎日アイヌからアイヌ語を学べるであろう」と依頼され、 快諾した。 パラサマレックは小さな鳥居家 (神田區旭町) の2階に住み、 大学に通った。

ある目、 パラサマレックは神保博士から遼東半島の地質調査に同行するよう言われたが、 バラサマレックは気がすすまないので代役として鳥居に行ってほしいと依頼。 鳥居は即座に承諾し、 神保博士にその旨を告げた。 神保博士は一度は承知したが、 互いの調査目的が違うということで鳥居の同行は実現しなかった。

この後、 遼東半島調査に意欲を燃やしていた鳥居は、 師の坪井正五郎に相談し、 東京人類学会から派遣されることになった。 この遼東半島調査が鳥居の海外調査の始まりであった。

「想えばこの遼東半島における調査の旅は、かのアイヌ人のパラサマレックにより端を発したもので、.
パラサマレックというアイヌ人が、 私の将来の目的や運命を占ったようなものだと考えてみるのも極めて興味のあることで、 私は今もなお彼にtるいての思い出は常に忘れられぬところである。」(『ある老学徒の手記』)

・クリール(千島列島)調査

1899(明治32)年4月、 シュムシュ島で日本人の組織する奉効義会会長の郡司成忠(1860- 1924)は、 東京帝国大学人類学教室のi平井正五郎(1863-1913)を訪ね、 シュムシュ島の遺跡調査を依頼した。 郡司はシュムシュ島で竪穴住居を発見し、 その竪穴は屋根が残っており、 屋根裏に箭が一束になって差し込まれて.いて、 その鑑は骨鱗であると伝えた。 この竪穴は、 ・坪井の唱えるコロポックルの遺跡ではないかとして坪井に調査を依頼したのであった。 .

坪井はこの依頼を鳥居に伝え、 鳥居に代わりに調査に行くよう頼んだ。 鳥居は自信がないと辞退したが、 坪井から再三の依頼を受けて、 結局この調査を承諾した。

5月上旬、東京を発ち、函館港から軍艦武蔵に乗船、エトロフ島ルベツ港に寄港、その後シコタン島に上陸し、当時強制移住させられていた北千島アイヌの調査を行った。

「日本人は南千島に徳川時代末期より居住するが、北千島にはその居住者はない。アイヌの如きも南千島のアイヌは北海道アイヌと同一系で、所調蝦夷アイヌに属している。彼等は蝦夷アイヌをヤングルという。即ち「南人」を意味する。然るに北千島アイヌは、等しくアイヌであるけれども、別派古来互いの交通もなく、各々相離れて生活していた。人類学上よりすれば、明治十七年に日本帝国政府はロシア政府と樺太の南部と北千島とを交換した時、その居住の北千島アイヌに向ってロシアに附くか、日本に附くかと尋ねたところ、彼等は日本に属したいと言ったから、遂に彼等を北千島列島の色古丹島に占守、幌筵、羅處和の三島に居住する者を移住せしめたのである。当時、同島に移住したこの人々は僅かに九十五（六?）人であった。広大な同列島に総人口は唯だ九十六人に過ぎないのは、余り人口が少な過ぎるように思われるが、実際はこれだけの人員であり、更に現今では六十二人となり、しかもそのうち男子より女子の方が十二人多い。かくの如き少数の人員は北海道のアイヌの人口一萬二千と比較すると大いに相違しているのに驚かねばならぬ。」

「北千島アイヌは、北海道アイヌと異なり、その家は草小舎でなく、土地を掘って柱を建て屋根を組み、入口のみを開き、その他は上より土を覆い、竪穴を構えている。即ち穴居である。これは両者の蝦夷アイヌの土俗と大いに相異しているところである。私は調査の必要上、一夜この竪穴に宿泊してみた。それから彼の土俗について調査を試みた。また此處で考古学上の古い竪穴を発見し、これを発掘した。」

（『ある老学徒の手記』）

シコタン島で調査の後、さらに列島を北上するが、シコタン島で知り合った50余歳ばかりのグリゴリーを雇い、調査に同行してもらった。グリゴリーは小柄で、正しく北千島アイヌ語を語り、ロシア語、日本語にも堪能で、北千島アイヌの説話等をよく知っていたから、助手として頗る役にたち、調査の成果が大いにあがったと鳥居は述懐している。

シコタン島から再び軍艦武蔵に乗船、クナシリ、エトロフを経て、クリール最北端のシュムシュ島に上陸した。まずは調査の発端となった郡司発見の竪穴を調査。この竪穴は北千島アイヌのものであることをグリゴリーとともに確認。そのほか各所で貝塚や住居跡を発掘し、石器や土器、骨器などを採集し、これらの遺跡は北千島アイヌに属すると推定した。

シュムシュ島調査の後、帰路再びシコタン島に立ち寄り1ヵ月余り滞在して、移住させられた北千島アイヌの村で調査を行った。

鳥居のクリール調査は、考古学的な遺跡調査から、住民の人類学的な体型一体質等の調査や言語、習俗、伝承、衣食住など幅広い調査をし、北海道アイヌとの比較研究を重点的に行った。

鳥居がクリール調査を実施した頃、学界では石器時代人コロポックル説、アイヌ説論争が盛んに行われていて、鳥居はこれら一連の調査によって、師である坪井正五郎のコロポックル説を否定し、小金井良精の主張するアイヌ説を補強する結果となった。

東京に帰った鳥居は、調査の成果を『東京人類学雑誌』に次々と発表した。それをもとに纏めたのが『千島アイヌ』（吉川弘文館、1903年)と仏文で書いた「考古学民族学研究・千島アイヌ」（『東京帝国大学理科大学紀要』第42册第1編、1919年)である。『千島アイヌ』は当初二分冊で発刊する予定であったが続編は刊行できていない。そのため、この書には千島の地誌、人口、人名、言語、土俗、産業などの記述にとどまっている。調査の人類学的、民族学的、考古学的調査の成果が総括的に記述されているのは、『東京帝国大学理科大学紀要』に収録されている論文である。この論文は千島アイヌの実態をあらゆる角度から記録した貴重な文献として高く評価されている。

このなかで、鳥居はアイヌ民族を4グループに分類して提えている。

1、北海道全島およびエトロフ島にいたる南千島を含めた蝦夷アイヌ
2、樺太アイヌ
3、ウルップからカムチャッカ南端にいたる北千島アイヌ
4、目本在住の完全に日本人化したアイヌ

鳥居はクリール調査の際、行きは函館港から軍艦武蔵に乗船、 帰路は根室港に立ち寄り、

ジョン・ミルンが発掘した竪穴住居の遺跡を訪れ、その後函館に帰港しているが、ほかに北海道内を踏査した形跡は現在のところ見当たらない。

鳥居はクリール調査の後、台湾調査、西南中国、蒙古等の調査に出向く。その後、鳥居は樺太に2度、東部シベリアに3度足を運んでいる。 1911年の南樺太調査の折、「南路のアイヌは樺太のアイヌ、 否アイヌの分布として最極北の所であって、 それより以北には決して彼等の分布はない」(『ある老学徒の手記』)と記述している。

*鳥居のアイヌ研究論文は、『鳥居龍蔵全集』の第5・7巻(朝日新聞社、1976年)にすべて収録されている。

4、 鳥居龍蔵の今日的意義一映像とコレクション一

鳥居龍蔵は、 1893(明治26)年第1回台湾調査の時、 初めてカメラを携行した。 野外調査にカメラを導入したのは鳥居が最初といわれている。

当時のカメラは箱型で大きく、 ガラス乾板に写し取る方式であった。 ガラス乾板は重く野外調査には不向きであったが、 鳥居はそれを克服しながら膨大な貴重な記録を残した。 中国西南部の調査の際には、40~50ダースの乾板を携行した。 同行の運搬人が「旦那、私の今運んでいる品物は、 その重さからすれば銀子でしょう」と尋ねたという逸話も残っている。 最初は鳥居自らが撮影 したが、 後には同行した助手の撮影によるものが多くなる。 ただ、 撮影対象や狙いは鳥居自身のものと考えて差し支えない。

現在、 東京大学総合研究博物館に保存されている写真乾板の総数は1859救、 鳥居が人類学教室在職中に撮影 したものである。 東大は1988年から写真乾板等の資料整理・再生に着手し、 1991年には「乾板に刻まれた世界一鳥居龍蔵の見たアジア」 展を開催して鳥居の業績を再評価する契機をつくった。

鳥居龍蔵写真研究会編「東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影写真資料カタログ(第1部~第4 部)」『東京大学総合研究資料館標本資料報告』第18号~21号、東京大学総合研究資料館、1990年
東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編『乾板に刻まれた世界一鳥居龍蔵の見たアジア』東京大学総合研究資料館、1991年

この他、 韓国国立中央博物館には朝鮮総督府に提出した写真資料 (実数不明) 、 徳島県立鳥居記念博物館にも写真資料 (整理中) が残されている。

天羽利夫「韓国国立中央博物館所蔵の鳥居龍蔵関係資料」『民族学の先覚者鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館、1993年 韓国国立中央博物館『硝子原板目録集』1~5、1997年 .

鳥居の残した映像は、 最近注目をあびているマンローの残した映像と同じく、きわめて貴重な第一級資料である。 マンローの残した映像はアイヌ民族・アイヌ文化に焦点を絞ったもので、 鳥居の幅広い諸民族の記録とは異なるが、 とりわけ動画で記録した映像は鳥居の静止画とはまた異なった意義がある。

いずれにしても、 =人の残した記録映像からは異民族・異文化への熱いまなざしが伝わってくる。 映像からは異民族・異文化の特徴を正しく提えて伝えようとの意図が窺え、その情報を広く海外に発信したことでも共通した意図が窺える。

国立歴史民俗博物館が平成18~20年度計画で実施している「マンローコレクション研究一館蔵の写真資料を中心に一」は、 東大が実施した「鳥居龍蔵博士撮影の日本周辺諸民族写真・乾板の再生・保存・照合」プロジェクトと同じく、二人の博士の業績を再評価するのに相応しいものである。

国立歴史民俗博物館製作「AINU Past and Presentマンローのフィルムから見えてくるもの」2006年

映像同様、 二人の残したコレクションも異民族・異文化を理解するうえできわめて重要なものであることはいうまでもない。

イギリスの博物館の収蔵されているマンローコレクション等をもとに、 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が北海道開拓記念館、 神奈川県立博物館とともに実施した企画展「海を渡ったアイヌの工芸」 で紹介されているように、 コレクションを通してマンローの異民族・へのまなざしを窺うことができる。

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構「海を渡ったアイヌの工芸一英国人医師マンローのコレクションから」2004年

この企画展より一足先、 1993年に鳥居龍藏没後40周年記念展として国立民族学博物館、徳島県立博物館にて開催した「鳥居龍藏の見たアジア」展も、東大の写真乾板整理の成果を活用しながら、 東大や国立民族学博物館、 鳥居記念博物館に収蔵されているコレクションをもとに、 コレクションの意義を改めて問い質すものであった。

鳥居記念博物館には鳥居龍藏関係の未整理の遺品が一括して収蔵されている。 遺品整理をすすめているが、 現在博物館移転計画が進行していて本格的な整理作業は移転後になる見通しである。 東大や国立民俗博物館が実施したような大掛かりなプロジェクトで遺品整理が行われることが望まれている。

鳥居龍藏の最大のテーマは、 いわゆる日本人や日本文化のルーツを巨視的に捉えようとするものであった。鳥居の手法は徹底したフィールドワーカーとして、 自身の目で確かめるという実証主義的なものであった。 そのフィールドはあまりにも広大で、 移動型であったがため表面的な観察に終わってしまったきらいがある。 しかし、当時の交通事情のなかで、 鳥居ほど危険を顧みず未到の地域を果敢に足を踏み入れた学者はいない。 鳥居の成果は100年を経た今日でも記録性という点で褪せることはなく、 とりわけ鳥居の残した映像記録と採集品は永遠に伝えられる。

台湾アミ族調査中の鳥居龍藏『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍藏博士撮影写真資料カタログ』より

鳥居龍藏関係主要年表

1870(明治3)4月4日	現徳島市東船場町の鳥居家の二男として誕生	
1876(明治9)	觀善小学校(現新町小学校の前身)に入学	
1877(明治10)	小学校を退学	
1886(明治19)	東京人類学会入会、 坪井正五郎と交流始まる	
1887(明治20)	「阿波国二古墳ノ記」(『東京人類学報告』2巻7号)を初報告	
1888(明治21)	坪井正五郎、鳥居家を訪問	
1890(明治23)9月	東京遊学	
1892(明治25)12月	一家で東京移住 「敢えて徳島人類学会に望む」(『東京人類学会雑誌』8巻80号)を著す。	
1893(明治26)	東京帝大人類学教室標本整理係の職につく	
1895(明治28)	兄友太郎死去。初の海外調査・遼東半島調査	**日清講和条約(7月)**
1896(明治29)	第1回台湾調査、婦途沖縄調査。この時、野外調査で初めて写真機を使用。	
1897(明治30)	徳島県木頭村の民俗調査。 第2回台湾調査	
1898(明治31)	東京帝大理科大学助手となる。 第3回台湾調査	
1899(明治32)	千島列島の調査。 『人類学写真集台湾紅頭嶼之部』(東京帝国大学理科大学)刊行	
1900(明治33)	第4回台湾調査	
1901(明治34)	市原キミと結婚(12月) 西南中国の調査 ・	
1902(明治35)	『紅頭嶼土俗調査報告』(東京帝国大学)、『人種誌』(嵩山房)刊行	
1903(明治36)	『千島アイヌ』(吉川弘文館)刊行	
1904(明治37)	沖縄諸島の調査。 この時、 野外調査に初めて鎖管蓄音機を導入。 初音誕生(10月1日)	**日露戦争(2月)**
1905(明治38)	東京帝国大学理科大学講師となる。 龍雄誕生(8月28日)。 第2回満州調査	**日露講和条約(9月)**
1906(明治39)	きみ子、蒙古カラチン王府女学堂に赴任。続いて龍蔵、同男子学堂教授となる。 きみ子、『蒙古行』(読売新聞社)刊行	
1907(明治40)	夫妻蒙古から帰国。 幸子誕生(3月23日)。 幸子を連れ再び蒙古へ 『苗族調査報告』(東京帝国大学人類学教室)刊行	
1908(明治41)	蒙古から帰国	
1909(明治42)	第3回満州調査。父新次郎が死去(5月3日)	
1910(明治43)	緑子誕生(5月2日)。 朝鮮半島の予備調査。 第5回台湾調査 『南満州調査報告』(東京帝国大学)刊行	
1911(明治44)	第1回朝鮮半島調査。南樺太調査。『蒙古旅行』(博文館)刊行 ・	
1912(明治45)	第2回朝鮮半島調査、 帰途富崎調査。母トク死去(6月19日)	
1913(大正2)	第3回朝鮮半島調査	
1914(大正3)	第4回朝鮮半島調査	**第一次世界大戦(8月)**
1915(大正4)	第5回朝鮮半島調査	
1916(大正5)	第6回朝鮮半島調査、 帰途対馬調査。龍次郎誕生(7月6日)	
1917(大正6)	本山彦一らと奈良・大阪・和歌山など調査 『平安南道黄海道古蹟調査報告書』(朝鮮総督府)刊行	
1918(大正7)	雑誌『武蔵野』発刊。諏訪調査 『有史以前の日本』(磯部甲陽堂)刊行	**シベリア出兵(8月)**
1919(大正8)	第1回東部シベリア調査	
1920(大正9)	パリ学士院からパルム・アカデミー賞を授与	
1921(大正10)	「満蒙の有史以前」の研究で文学博士を授与。 北樺太と第2回東部シベリア調査。	
1922(大正11)	東京帝国大学助教授となる。 國學院大學講師となる。 徳島城山貝塚の発掘。 『北満州及び東部西伯利亜調査報告』(朝鮮総督府)刊行	
1923(大正12)	龍男がパリに留学。 國學院大學教授となる	**関東大震災(9月)**
1924(大正13)	東京帝国大学を辞職、鳥居人類学研究所を設立。幸子がパリに留学 『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』(岡書院) 、『武蔵野及其周囲』(磯部甲陽堂)、『日本周囲民俗の原始宗教』(岡書院)、『諏訪史 第一巻』(信濃教育会諏訪部会)、『下伊那の原始及先史時代』(信濃教育会下伊那部会)刊行	
1925(大正14)	宮崎県延岡の調査 『武蔵野及其有史以前』(磯部甲陽堂)、『人類学上より見たる我が上代の文化(1)』(叢文閣)刊行	
1926(大正15)	中国山東省調査 『極東民族』(文化生活研究会)、『先史及原史時代の上伊那』(信濃教育会上伊那部会)、『人類学上より見たる西南支那』(富山房)刊行	

1927(昭和2)	龍雄がパリにて死去。 第4回満州調査	
	きみ子、『土俗学上より観たる蒙古』(六文館)刊行	
1928(昭和3)	上智大学創立に尽力、 文学部長兼教授となる。第3回東部シベリア調査・第5回満州調査。『満蒙の探査』(満里閣書房)刊行	
1929(昭和4)	宮崎県延岡の調査 『西比利亜から満蒙へ』(龍蔵、きみ子、幸子共著、大阪屋號書店)刊行	
1930(昭和5)	第3回蒙古調査	
1931(昭和6)	第6回満州調査。『川内村史』監修のため帰郷	**満州事変(9月)**
1932(昭和7)	第7回満州調査・第7回朝鮮半島調査	
	『満蒙を再び探る』(きみ子共著、六文館)刊行	
1933(昭和8)	第4回蒙古調査・第8回満州調査。國學院大學教授を辞職	
1935(昭和10)	第9回満州・華北調査	
	『上代の日向延岡』(鳥居人類学研究所)刊行	
1936(昭和11)	『考古学上より見たる遼之文化 図譜(第1~4冊)』(東方文化学院東京研究所)、	
	『満蒙其他の思い出』(岡倉書房)	
1937(昭和12)	ペルー・ポリビアで先史時代遺跡の調査	**日中戦争(7月)**
	『遼の文化を探る』(章華社)刊行	
1938(昭和13)	遼・北宋関係遺跡調査	
1939(昭和14)	北京に出発、 燕京大学客座教授となる	
1940(昭和15)	満州遼代画像石墓、山西省雲崗石仏、山東省遺跡調査	
1941(昭和16)		**太平洋戦争(12月)**
1943(昭和18)	『黒電江と北樺太』(生活文化研究会)刊行	
1945(昭和20)	燕京大学客座教授に復帰	
1951(昭和26)	燕京大学を退職(7月)、 中国より帰国(12月)	
1953(昭和28)1月14日	龍蔵、東京にて死去、82才。	
	『ある老学徒の手記』(朝日新聞社)刊行 . 1959(昭和34)8月19日 きみ子、東京にて死去、79才。	
1965(昭和40)3月24日	徳島県立鳥居記念博物館開館	

1975(昭和50)～1977(昭和52)『鳥居龍蔵全集 第1～12巻・別巻』(朝日新聞社)刊行

*現在使われていない国名 ・地名 -民族名を記載しているが、 鳥居龍蔵が当時用いたものをそのまま使用。

鳥居龍蔵関係主要文献

・鳥居龍蔵『ある老学徒の手記一考古学とともに六十年』朝日新聞社、 1953年

・鳥居博士顕彰会編『図説鳥居龍蔵伝』鳥居博士頭彰会、1965年

・岸 積『鳥居龍蔵伝』徳島郷土双書10、徳島県教育会出版部、1966年

・徳島県立鳥居記念博物館編『鳥居龍蔵博士の思い出』徳島県立鳥居記念博物館、 1970年

・鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集(第1巻~第12巻、別巻)』朝日新聞社、1975年～1977年 . ・鳥居龍蔵写真研究会編「東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍蔵博士撮影写真資料カタログ(第1部～第4部)」『東京大学総合研究資料館標本資料報告』第18号～21号、東京大学総合研究資料館、1990年

・ 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編『乾板に刻まれた世界一鳥居龍蔵の見たアジア』東京大学総合研究資料館、1991年

・ 国立民族学博物館編『民族学の先覚者一鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館、 1993年

・徳島県立博物館編『徳島の生んだ先覚者一鳥居龍蔵の見たアジア』徳島県立博物館、 1993年

・順益台湾原住民博物館編『鳥居龍蔵眼中的台湾原住民一跨越世紀的映像』順益台湾原住民博物館、1994年

・中薗英助『鳥居龍蔵伝一アジアを走破した人類学者』岩波書店、1995年
*同書は2005年に岩波現代文庫に収録、刊行

・田畑久夫著『民族学者鳥居龍蔵一アジア調査の軌跡』古今書院、1997年 黄 才貴『影印在老照片上的文化鳥居龍蔵博的貴州人類学的研究』貴州民族研究所、2000年

・徳島地方史研究会編「第26回公開研究大会特集・没後50年、今、鳥居龍蔵を考える」『史窓』34号、徳島地方史研究会、2004年

・田畑久夫1『鳥居龍蔵のみた日本一日本民族・文化の源流を求めて』古今書院、2007年

鳥居龍藏没後の動向

・1953年1月14日、東京にて鳥居龍藏死去
鳥居龍藏『ある老学徒の手記一考古学とともに六十年』朝日新聞社、 1953年
　*同書はネスト企画より2003年に復刻版刊行
1月17日、日本人類学会、目本民族学協会、日本考古学会、日本考古学協会、国学院大学考古学会、武蔵野文化協会による合同葬 ・

・1959年8月19日、東京にてきみ子夫人死去 .

・1965年3月24日、 徳島県立鳥居記念博物館が鳴門市に開館
鳥居博士顕彰会発足、 鳥居龍次郎氏が事務局長に就任、 県より館の運営を委託される
鳥居博士顕彰会編『図説鳥居龍藏伝』鳥居博士顕彰会、1965年
徳島県立鳥居記念博物館編 『鳥居龍藏博士の思い出』徳島県立鳥居記念博物館、1970年

・鳥居龍藏全集の刊行
　鳥居龍藏『鳥居龍藏全集(第1巻~第12巻、別巻)』朝日新聞社、1975年~1977年

・1988年、東京大学総合研響料館収藏の写真乾板等の資料整理・再生に着手
　鳥居龍藏写真研究会編 「東蒙、大学総合研究資料館所藏鳥居龍藏博士撮影写真資料カタログ(第1部~第4部)」『東京登総合研究資料館標本資料報告』第18号・~21号、東京大学総合研究資料館、1990年
・1991年2月、東.JI,、大学総合研究資料館にて「乾板に刻まれた世界一鳥居龍藏の見たアジア」展開催　東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編『乾板に刻まれた世界一鳥居龍藏の見たアジア』東京大学総合研究資料館、1991年

・1993年、 没後40周年記念展 「鳥居龍藏の見たアジア」 を国立民族学博物館(3月)、 徳島県立博物館(10月) にて開催
　国立民族学博物館編『民族学の先覚者一鳥居龍藏の見たアジア』国立民族学博物館、 1993年
　徳島県立博物館編『徳島の生んだ先覚者一鳥居龍藏の見たアジア』徳島県立博物館、 1993年
＊ この企画展準備調査において、 韓国国立中央博物館で鳥居龍藏関係の調査資料 － 写真資料等を確認

・1994年2月、北海道立北方民族博物館にて特別展「鳥居龍藏のみた北方民族」を開催
北海道立北方民族博物館編「鳥居龍藏のみた北方民族」財団法人北方文化振興協会、1994年

・1994年9月、 順益台湾原住民博物館にて鳥居龍藏展を開催
順益台湾原住民博物館編『鳥居龍藏眼中的台湾原住民一跨越世紀的映像』順益台湾原住民博物館、 1994 年

・1998年12月17日、鳴門市にて鳥居龍次郎氏死去

・2000年10月17日、 鳥居記念博物館にて遺品類再発見

・2003年2月、徳島地方史研究会主催の公開研究大会「没後50年、今、鳥居龍藏を考える」を開催
徳島地方史研究会編「第26回公開研究大会特集・没後50年、今、鳥居龍藏を考える」『史窓』34号、徳島地方史研究会、2004年

・2003年10月、鳥居記念博物館にて没後50年記念企画展「鳥居龍藏の世界」を開催。再発見の遺品類の一部を公開

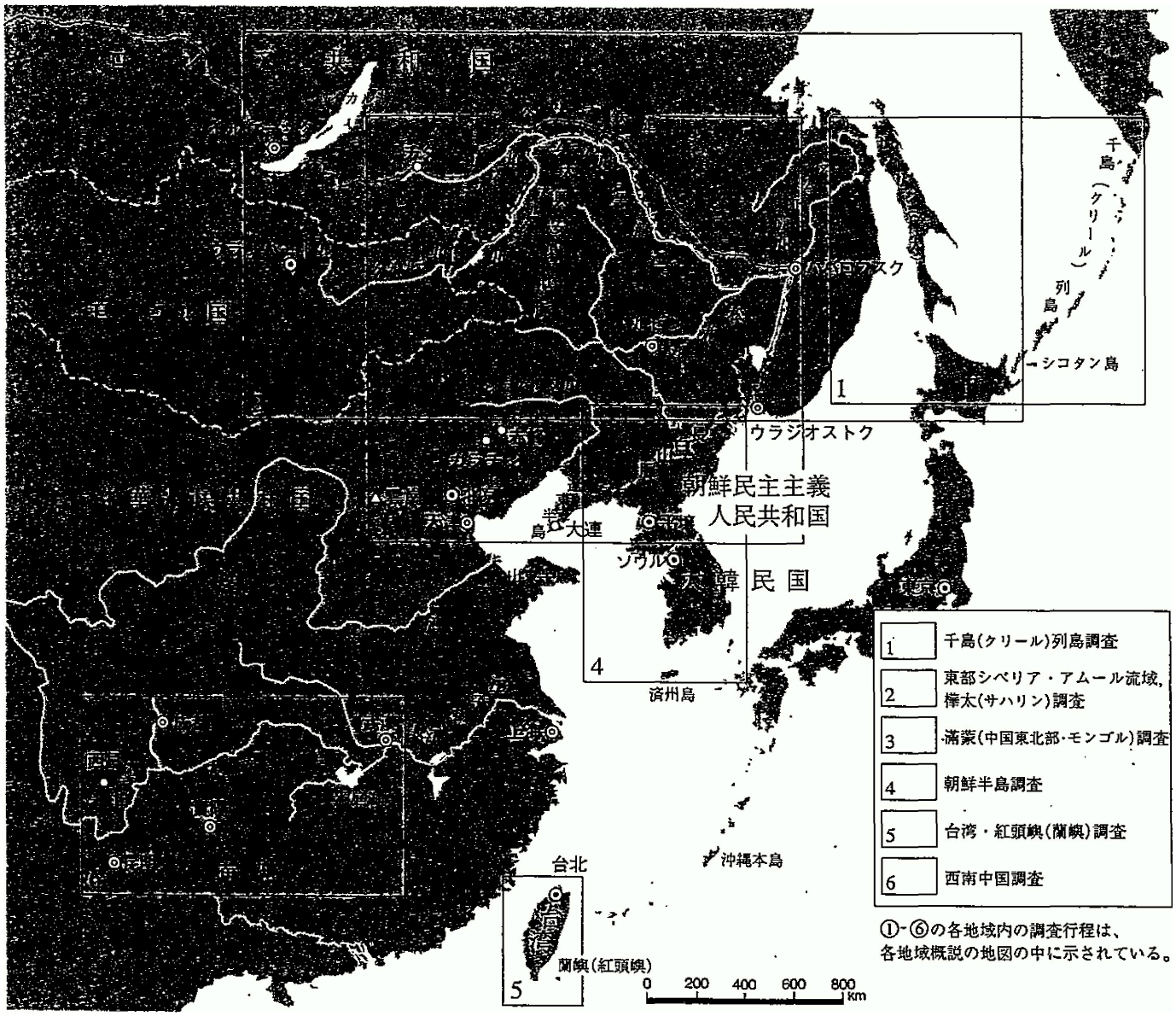
・2004年6月、沖縄県立埋藏文化財センターにてロビー展「鳥居龍藏一沖縄考古学調査100年」を開催
・2005年2月、沖縄県石川市立歴史民俗資料館にて企画展「鳥居龍藏のみた沖縄」を開催

・2005年2月、鳥居記念博物館にて開館50年記念企画展「再び鳥居龍藏を考える」を開催

・2006年5月、「鳥居龍藏を語る会」発足、活動を始める

現在の鳥居記念博物館(鳴門市)は老朽化のため、文化の森総合公園内に2009年11月を目標に移転することが決定しており、 新たな展示計画等が進捗している。

鳥居龍蔵のアジア調査一全体地図



国立民族学博物館編集・発行『民族学の先覚者 鳥居龍蔵の見たアジア』より複写
＊編集委員長は佐々木高明先生(元民博館長 前(財)文化振興研究推進機構理事長)
執筆者に天羽利夫先生(本日の講師)、大塚和義先生(元民博教授)など (注記=吉原)